

婦人子ども

第十四卷
第二號



大正三年二月五日

フレール會

第十四卷第二號目次

自動性の教育

下田次郎

學齡前兒童の發達と教養

入澤宗壽

『ジェーン・アイヤ』

岡田みつ

子供の肺炎

石塚保吉

我國の郊外保育に就きて

佐藤ます

幼稚園日記 (二)

田中生譯

保育入門 (二)

倉橋惣三

フレーベル自傳 (第二回)

本誌定價

一冊 郵稅共金拾壹錢 六冊前金郵稅共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件をも含む)の御手紙は
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、
雨森劍宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正三年二月四日印刷
大正三年二月五日發行

編輯兼發行者 倉橋惣三
東京府豐多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四

印刷者 平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場
東京市小石川區久堅町七十四番地

發行所 フレーベル會

兒 童 研 究

社會の改善も、人類の向上も、文明の進歩も、國家の發展も、詮じつむれば、ただ善良の兒童を得るにありと言ふことになる。兒童を愛する國は興り、兒童を顧みざる國は亡ぶ、これは千古萬古變ることなき箴言である。兒童の研究は、ひとり教育家や、醫家に一任して置くべきものではない。世の父兄自ら研究すべき筈のものである。兒童の研究は即ち我を愛し、家を愛し、國を愛し、人類を愛することになる、兒童のために最善を謀らざる家庭は、決して幸福を望むことは出來ぬ、我儕は何人も兒童の研究に興味を持たれんことを切に希望してやまないのである。

○會費半簡年分金九十錢 同一簡年分一圓八十錢○兒童研究は毎月一回二十五日發行○會員には無代頒布○見本金十五錢

東京市本郷區千駄木町五十番地

日 本 兒 童 學 會

二月常會

二月十四日(第二土曜日)午後二時より
東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て

講演

子供といふもの

巖谷季雄氏

○巖谷小波氏の有益にして趣味豊なる講演
○會員會員外諸氏の多數の御來會を希望す

二月

フレイベル會



第 十 四 卷 第 二 號

自動性の教育

東京女子高等師範學校教授 下 田 次 郎

物は、たい理屈を本で讀んだり、抽象的に聞いたりして居つただけでは、よくわからぬ事が随分ある。殊に教育の如きはさうで、兒童心理學の書物をとれだけ見ても、實際生きた子供にあたつて見ないと、子供の心理状態はよくわからない。

自分は、澤山小さい子供をもつて居るが。朝夕之に接して見て居ると、書物に得られないいろ／＼の事に相逢ふのである。

一體、子供は、自發的、自動的のもので、靜にして居る事は出來ない、朝から晩まで何かして居なくてはならない、して居ない時は寢て居る時である。さて、絶えず何かして居るには、その材料が要る、玩具だけではなかく足りない、あらゆる家庭に散らかつて居る家具は、子供にとつては、皆一種の玩具で筆筒のひきてでも、火箸でも、障子でも、本でも、なんでも、手あたり次第之を弄び、また之をこわすのである。だから大事のものは決して出しておかない。子供の多い家の障子は穴だらけであるか、つくろひばりだらけである。自分が歸つてくれば、自分が活動の相手になるので、帶を踏み臺にして肩車に乗つ

たり、膝に来て坐つたり、頭や顔をいぢつたり、ろくにやすむひまもないやうな次第である。要するに、子供は活氣充滿して活動せずに居られないものである。それをむやみにおさへつけるのは残酷であるのみならず、子供の精神の發達を害し、時には消極的引込思案のものとなつて、最も子供らしからざるものになる事がある。ところが一體。東洋流のしつけは、なせよと云ふよりもなすなといふ方が多くて、子供にもをとなしくしなくてはいけないと云つて、活動ざかりのものを大人の標準で、靜にひかへ目にさせるやうにする。これは不自然であるのみならず、さういふ習慣がつくと、成人して後も不活發な消極的人になる、人の命令を待つていなくては動かぬやうな人になつてしまふ。それで少しやかましいのやうるさいのは我慢して、教育上有害でない限はなるべく子供の自發的活動に任しておくがよい、子供を見るとその家庭がわかる。妙にをとなしくて尻込みをする子

供もあるし、何處へいつても容赦なく云ふ事は云ひ、動くだけは動く子供がある。

子供は導きかたによつては、喜び勇んで活らくものである。たとへば女中に床をあげさせたりして居る處で、朝は床を自分でたゝむとよいといひ聞かせると、翌る朝から勇んで自分で床をあげる、女中が來ても退けて、踏み臺までもつて來て、七ッ八ッの子供が押入れへ蒲團を入れる兄弟互に競争でやる。或は雨戸でも女中に開けさせるより自分で開けたいので、兄弟が硝子障子をあつちへやつたり、こつちへやつたり、相應じて、十枚あまりの戸をくり込んでしまふたりする。それをかういふ事は女中のするものだとして定めておくとそれが癖になつて、外の事もしなくなる、それで大勢の女中を使ふて居る家の子供は、兎角受け身で、何でも人にして貰つて自分は活かない、なまけきつて居る、かういふ事が富裕な家の子供を生氣地なくする一つの原因であらうと思ふ。中には鉛筆一

本削る事も人にさせて自分にしないのがある、右の事を左へもしないでむやみに人を使ふやうな人間になるのがある。是は、つまり子供時代からの親のしつけによる事であると思ふ。この親の仕むけが他日、自動的有爲の人になるか、他動的無爲の人になるかのわかれ目であると思ふ。

一體。東洋の人民は、日本もさうである、上から命令が下つて、それによつて下のものはやるといふ習慣が昔からついて居る。自分でやり出す事はしない、上から命令の下るのをまつて居る。今日でも、日本の人間は、政治でもよほど他動的で、上から與へられたるものは與へられたるものとして受取るだけで、自發的に人民から建白し、促してある事を成立たしめたり、改良したりする事はない。家庭でも上のものゝ命令するのを俟つて動く、下の者が命令を俟たずに進んでやるといふ事は少ない。殊に婦人はさうである。日本の文明でも、舊くは支那の文明を、新しくは、西洋の文明

を受取たのである。受取る事はするが、自ら工夫發明する事はしない。かく歴史的、因襲的に、政事にしても、風俗、習慣、思想行動何でも受身にやる癖がついて居る。之れは今後の進歩をよほど妨げるものであると思ふ。

子供に對する大人のやり方がやはりさういふ習慣がついて居るから、しらすく、子供を他動的のものとして取扱ふやうになつて來て居ると思ふ。併し、之れは好ましからざる事である、ひとり子供の爲めのみならず、日本の進運にも關係のある事と思ふ。それで、自後、子供の取扱ひ方は、一層子供を自由に、境遇にも氣をつけて、自動的自發的になるべく自ら活はたかすやうにしたいと思ふ。されば、英米あたりの子供を見ると直ぐわかる事で、あゝなくては、個性のある、我のはたらしと名のる事の出來る人間は出來がたい事と思ふ。幼兒を保育し、兒童を教育するものは大に考へねばならぬ事であると思ふ。

此事はわかりきつた事であるが、社會の空氣が
そうなつて居ないから、理屈では承知しながら、

自然反對なやり方をする事があると思ふから殊更
取り出して云つたのである。

學齡前兒童の發達と教養

文學士 入澤 宗 壽

兒童の研究は輒近に於て非常に進歩した。殊に
幼兒の研究は割合に早くから手をつけられて、精
神上の發達について詳細なる記述も夙にあらはれ

出來て居ると思はれるので、その前半即ち六歳以
下の兒童に關する所を簡單に紹介し併せて教養上
の注意と批評とを加へて見やうと思ふ。

一、兒童の發達段階

て居るが、或は單に綿密な記述といふに止まり、
或は個々の能力の發達の記載であつて、綜合的に
個性の發達を叙述したものが甚だ少ないのは教育
とか保育とかの方面に取つては憾み無き能はずで
ある。然るに近時米國の兒童心理學者カークバト
リック氏は「個性の育成—兒童發達の主觀的見解」
といふ書に於て個性の發達を綜合的に見主觀的に
見て、其の發達段階の區分も從來のとは多少面目
を異にして居つて甚だ教育的見地から見てうまく

カークバトリック氏も云つてゐる如く、教育者の
立場からすれば何よりも兒童の發達段階を知るこ
とが必要である。何れの段階にあるかを知つて教
養を施すでなければ有効で無いばかりで無く、時
に害をも生ずる。尤も吾々から見れば、兒童の現
在に捉はれて、それを上の段階に導き上げるとい
ふ事を忘れるのは避く可きであるが、その發達程

度を始終考慮に入れて取扱はなければ、決して有効なる教養の結果は擧つて來ない。叱つても何の事か分らない時期の幼兒を折檻する母親を能く見受ける毎に吾々は彼等に少くとも一般的理解を與へてやりたいと思はざるを得ぬのである。かくの如くにして發達段階の知識は保育者教育者に取つて何よりも大切なる事柄である。これ吾々のカークバトリック氏に聞かんとする所である。

而して從來の發達段階の區分は前にも述べた如く教育的でなかつた。といふは、單に身體の發達から特に身長率から區別したり又は精神上知力から又は感情意志のみから區分したり又は系統發生即ち今日迄の人類の發達との平行から區別したものであつた。これらもその一部面に於ては參考になるけれども、教育者に手つ取り早く役立つものは是等を綜合したものでなければならぬ。斯くて心身上の著名なる新活動の表はれを以て區別する事が生じたのであるが、カークバトリック氏は特

に人が他の動物と異なる所以の點即ち社會的衝動と社會的影響の點から區別して居る。これは精神上にしかも亦この一部分に偏して居るやうにも思はれるが、吾々に取つては進んだやり方のやうに考へられる。身體の發達による階段とその研究とは從來醫家に依つて可成、完全の域に進んで居る。

吾々の求める點は精神上的の綜合的見解であつて而して又社會的個人として社會に順應して個性を發展して行く方面の見方である。カークバトリック氏は茲に着眼して次の如き分類を主張して居る。

第一期は生後滿一箇年迄で氏はこれを前社會時代といつて居る。此の時代に於ては事物及び人間について全く客觀的に影響されるのみで、人間の思想及び感情については影響を受けないといふのを以て斯く呼んで居る。第二期は二歳から三歳の終りまで、カ氏はこれを模倣及び社會化の時代と呼んで居る。この二年間に於て兒童は漸次精神的影響を受け入れるやうになり、兒童の精神状態は

多くの點に於て其の周圍の人間から決定せられるといふのである。第三期は個性化の時代と呼んで居つて四歳の始めから六歳迄である。此の時期に於ては、前の時期に發達した人格が一層明らかに個性的となり、他人の特性を單に取り入れるので無いといふので斯く命名して居る。第四期以下は學齡以後で茲に述べない所であるが、彼は此の六歳から十二歳迄を競争的社會化の時期と呼び、それから十八歳迄を第五期の青春期又は過渡期と呼び、第六期、十九歳から二十四歳までを青年後期と呼んで居る。かくして此の時期の區分は大體に於て一般の身心の發達から區分するものと一致して居るが、彼の見地が目新しく注意に値して居る。以下彼が第一期から第三期迄の叙述を述べて見やうと思ふ。

二、前社會時代(滿一歳まで)

此の時期の特質。此の時期は身體上及び精神上

急激な發達をなす時代であるが、社會的影響は此の後の時期に比べると殆んど働がないといつてもいゝ程僅かである。兒童には凡ての高等なる動物と同じく反射的及び本能的傾向が先づ現はれる。併し其の多數のものは或時期の間は現はれないで、動物よりも一層多く模倣的傾向が盛である。動物と同じく事物や人間の行動の刺激に反應するが、併し動物よりは多少多くの精神上の刺激を受ける。人間の顔面の表情や音聲の調子が先づ兒童に刺激を與へて、兒童は先づ微笑の模倣をやる。これは本能よりも經驗の結果に本づくもので、微笑の如き精神状態の表はれが、兒童の顔面の運動を起してそれが同様な精神状態を兒童の心中に起すやうに導く。かくして此の後一層直接に他人の精神状態に動かされるやうになるのである。

併しながら、これら意識的生活は此の時期の兒童の發達に著しき影響を起すものでは無く、この時代に於ては事物及び人間から與へられる感覺上

の刺戟が主なる影響を與へるに過ぎない。この期の兒童の精神生活は主として此の種の刺戟を受けて反應する事によつて發達するので物理的環境には敏活であるが、精神的環境にはそうでない、かくして此の期間は他人の精神よりも事物の方が大なる影響を與へる唯一の時期で、これ以後は、精神上の影響を受けることが大になつてくる。

此の期間中に起る變化。此の時期中即ち滿一ヶ年間に兒童の身體の大きさは殆んど三倍にもなるので、かゝる成長の比例は此の後の時期には見出されない所である。これは身體上のみでなく、精神上に於ても然りて即ち殆んど精神生活を有せない様な状態から、知性に於て高等動物をも凌駕する域にまで達し、二三の反射的本能的運動をするに過ぎない状態から一躍して手と音聲とを支配し得るに至るのである。

この一年間に於て兒童は欲するものをつかむことが出來、匍ふことが出來、物に捉まつて歩く

事さへも出來るやうになる。この筋肉の共同調和は又精神の共同調和にも同様の變化を來たして、茲に兒童の感覺的及び其の他の精神状態はもはや孤立したもので無く、連結せられ、有機的に統合せられ、意識は無意味の混沌状態でなく、各感覺が各意義を有する連關せる全體となるのである。又この期の終りに好奇心や驚愕も起り、又色々の表情を模倣し、新しき運動と音聲とを真似るに至つて人間の特性を急に獲得して來るのである。

此の時期の取扱方。かゝる急激なる發達、著しき生理的變化の時期に於て最も注意を要するのは兒童の健康である。統計の示すこの一年間の死亡率が非常に大であることは、ます／＼茲に意を深うせしめるものである。かくして身體上の注意が此の期に最も顧られなければならぬのであるが、その中でも食物の注意が最も肝要で乳兒期として母の食物が最も注意せられねばならない。衣服、空氣運動等は此の期に於てたゞ第二位に來る問題

である。

兒童の生理的發達が周圍の好都合と好食料と休息と睡眠で規整されると同時に客觀事物の刺戟の種類と數と秩序とも整理せられなければならぬ。刺戟の變化が強きに過ぎ又急激に過ぎれば、兒童を疲勞させ神經質にし、事物の眞の性質を發見する餘裕を與へない。兒童は刺戟を受けなければならぬが限界がある。併し此の限界に於て凡ての色と凡ての形を具へた物に依り。又は色々の音や事物で感官を練習する機會を與へねばならぬ。兒童は是等の事物を色々に取り扱ふ力を持つて居て、これが兒童をして他の動物より優れた自由の觀念を形成せしめるのである。故にこの期に於て兒童精神の發達は、多様のものに接する機會を多くしなければならぬ。

又此の期から善良なる習慣を與へるやうにせねばならぬ。犬や猫を或る種の躑に慣らす如くに、兒童も同様の方法により躑をなす可きであつて、

然らずんば家庭の暴君となつて仕舞ふ。固より此の期間には善惡を意識しないけれども、次の時期に於て意識的生活に又彼の性格に影響を及ぼす様の事はこの時期中に習慣をつけねばならぬ。かくて兒童はこの期間に精神的のものとしては影響を受けなくとも周圍の人によつて或習慣をつけるやうに導かれるのである。

如上はカークバトリック氏が第一期に於ける教養の方針である。身體上に於ける非常なる注意の必要は何人も異論のない所であらう。感官練習の注意も亦正當で、その必要は多くの教育家が夙に説いた所である。フレーベルは嬰兒が横臥して居る所に球をつるして置けといひ、ヘルバルトは色々の形のを吊るせよといつて居る。視覺の發達と觸覺の發達は實にこの期に伴つて起るもので兒童は引出しを明けたり締めたり棒を穴に附き込んだりする。本能的に是等の活動は感官の練習をやる。これにカ氏の所謂機會と材料とを與へれば

満一年頃の兒童に立派な觸覺練習が出来る。否自らやりつゝあるのである。これを系統立てるのは固より結構であるが、知識教育の準備として學齡を超えた兒童に初歩的觸覺練習をやるモンテッソリ式心酔者には感服が出来ない。正常の兒童では一歳前後から自らやつて居る。その時にこれを導かねばならない。痴兒教育でこそ成長した者をつかへまで感官の練習から始めなければならぬ。小學校に於て初歩的觸覺練習をやるとは以ての外である。これは一歳頃からの注意で澤山である。最もこれは知育の準備としての教育についてであつて技藝的堪能の教育は固より別である。かくして吾人はこの第一期に於て感官の練習に機會を與

『ジエーン・アイア』(三)

|| 英文學にあらはれたる子供(十四) ||

東京女子高等師範學校教授 岡田みづ

て導いて行くことの必要を唱ふるものである。次に躑なり習慣を與へる事については自由主義者否放任主義者は大に反對するであらう。併しなからこれも決して無理なことでは無い。ルッソオでさへも自然的の欲望と想像的の欲望とは區別して後者は幼時から許すなといつて居る。幼時に放任して急に矯正しやうとするのは大人の矛盾である。とロツクはいつて居る。固より發達段階を考慮に入れて無理な注文をしてはならないが、身體的の習慣は實にこの第一時期にも可能であつて、教養保育の任に當るものは此の時代から相應して善良なる躑けを與へる事を忘れてはならない。

次にジエーンの記憶に印して居る事は、恐い夢

を見たとの感じで目が覺めたのと、目の前の赤い

恐ろしい光るものに、黒い棒が格子に嵌つて居るのどであつた。人聲も耳に入つたが、風だか波だかの響に包まれた太い洞聲うらごゑに聞こえた。つまり、苦惱と、不安と、萬事を忘れさせる程の恐怖の念とが、心の働を亂して居たのだ。暫くあつて、ジエーンは誰か、自分に手を掛け、抱き起こして坐らせて呉れるのに氣が付いたが、取扱ひの手柔かな事は、嘗て覺えが無い程であつた。ジエーンは、枕だか人の腕だかに凭り掛つて、樂になつた氣持がした。

五分も経つと、惑ひの雲が晴れて、ジエーンは、自分がベッドの上に居て、赤い光りは、暖爐の火だと解つた。丁度夜で、燭燭が卓子の上に置いてあつて、ベシーが手に水鉢をもつて床の下手に立つて居ると、男の人が自分を覗き込みながら、枕邊の椅子に坐つて居る。

ジエーンは、言ひ知らぬ心安さを覺えた。見知らぬ人——此家の人でない人——リード夫人の親

族でない人——が此部屋に居るからには、この人の庇護を受け、我身は安泰だとの慰藉を得たからで、ベシーを見て居た目を移して、その男の人の顔を飽くまでも熟視した。其人は、ロイドといふ藥劑師で、以前から、ジエーンの知つてゐる人であつた。リード夫人は、召使共に病人があると、時々此人を頼むので、自分や子供の病わづい時は、本當の醫者を招くのであつた。

「私は誰です。解りますか。」とロイド君は尋ねた。ジエーンは其名を言つて、同時に手を差し伸べた。

ロイド君はその手を取つて、莞爾しながら、「いまによく成りますよ。」と言つた。

其から、ジエーンを横にして、ベシーに、よく氣を付けて夜中病人の心を亂さぬやうにと命じ、尙二三の指圖をして、翌朝來診するとの旨を告げて、悲しや、ロイド君は歸つて終つた。この人が枕元に居て呉れる間は、回護かまへて貰へるやうな氣分

だつたのに、此人の姿が戸の彼方に行つてしまつた時には、部室が暗くなつて、氣が沈んで、何とも言へぬ悲哀の情が壓迫して來た。

「眠られさうに御思ひなすつて、ジエーンさん。」
とベシーが幾分やさしく尋ねた。

ジエーンは、答に躊躇した——次のベシーの言葉が荒くはあるまいかとの心配で、

「どうだか眠つて見やう。」

「何か御飲みなさりたいものか、召し上りたいものがありますか。」

「否。」

「では私就寝しますよ。もう十二時過ぎですから。もし何か御用でしたら御起しなさいませ。」

これは又何といふ丁寧な事だろうと思つて、ジエーンは、大膽に問ひを掛けた。

「ベシーや、一體私はどうしたの。病氣なの。」

「赤室で御泣きなすつた爲で、病氣御成りので

せうが、直に快癒しますよ。必然。」

と言ひ捨て、間近の女中部室へ入つたが、

「セーラさん、あの部室へ來て一所に寝て下さいな。」

到底今夜は、一人で、あの御子と一所には居られない。あの人は死ぬかも知れませんが、あんなに氣絶するなんて不思議だね。何か恐いものでも見えたのか知らむ。奥さんがあんまり酷いので。」

と言つてゐるのが聞えた。セーラはベシーと一所に入つて來て、二人とも床に就いたが、眠るまでに三十分位ひそ／＼話をしてゐた。其對話が斷片的にジエーンの耳に入つたのだが、何の話をしてゐるのだから、分りすぎる程によく解つた。「何だか白い衣物を着たものが前を通つて、すつと消えたのですと。」「大きな黒い犬を後に連れてね。」部室の戸を三度強く叩いて「あの方の墓石の上に光るものが見えたな」と言ふのであつた。

やつと二人とも眠り付いた。暖爐の火も、蠟燭

の火も消えて終つた。併し、ジエーンは不氣味さに、耳も、目も、心も、力が張りつめてしまつて其長の夜を眠り付かれないで過した。そんな恐れ方は、子供でないでは出来ないのである。

翌日晝前に、ジエーンは床を離れ、着物を代へて、子供部屋の暖爐の前に、シヨールに包まれて坐つた。體に力がなく、委頓した気分だつたが、身體よりも心に言ひ知らぬ情ない思ひのあるのがもつと辛かつた。——唯情なくて、涙が溢れ出るごとく言つたら止度なしで、一零拭ふとすぐ後のが落ちて來るのであつた。

一體ならば、悦んでゐる筈なのに、ジエーンは思つた。リード家の人は、皆馬車へ乗つて出掛けて留守であるし、アボットも、他の室で縫物をして居て、唯ベシーばかりが、玩具を仕舞つたり、抽出しを片付けたりして、彼方此方動き廻はつて、時々珍らしくも、優しい言葉を自分に掛けて呉れるのであるから、今迄始終こき使はれて、止む間

なしの小言を聞いてゐた身の上に比べれば、極樂世界の心地がしさうなのに、神經の疲れ惱んでゐる身には閑寂の境も慰めとならず、興ある事も刺戟の種にはならぬのであつた。

ベシーは、臺所に下りていつて、皿に御菓子を載せて持つて來てくれた。其皿は極彩色で薔薇や何かの花の中に、風鳥が止まつて居る畫が畫いてある、ジエーンのいつも奇麗だと歎賞してゐる品であつた。其を手にとつて、よく見させてと屢々乞ふても、あなたのやうな人にとの一言で、撥付けられてしまつてゐたのだが、今其貴重な皿を、ベジーが膝の上に載せて呉れて、その中の御菓子をお上りなさいと勸めて呉れる。併し折角の親切も、今となつては効力なしで、ジエーンは、食べやうとしても食慾なく、鳥の羽も花の色も色が褪せたやうで見るに堪へかねて、其儘押しやつて終つた。ベシーは、書物でも上げませうかと言つて呉れた。本と言はれて一寸氣が進んで「ガリバー

の島廻り」を取つて來てと頼んだ。此本は、前には繰り返し／＼面白がつて讀んだもので、中の話を事實だと信じきつて居たので、いつかは、自分も船に乗つて、ガリバーの經廻つた小人島、に行つて見られると思つて居た。扱その本を今手にして見ると、面白いどころか、氣味の悪い、異様の畫ばかりで、ガリバーといふ人も、厭な恐ろしい土地を漂浪へ歩いてゐる、氣の毒な人間としか思はれなかつたので、書物をはたと閉ぢて、之も、亦卓子の上に押しやつてしまつた。

ベシーは部屋の取片付を終り、手を洗つて、一つの抽出しを明けて、中から絹や縞子の小切を持ち出して、デョーリアナの人形にと、帽子を製り始め、而して縫ひながら歌を唱ひ出した。その歌はジエーンは前にも度々聞いた歌で、子供心にベシーは美しい聲だと思つたので、嬉しがつて聞いたのだ。其れが、今は聲に變りはないのだが、節が哀しく聞こえ、殊にベシーが仕事に氣を取られて、

疊句の部を、細く、緩く歌ふと、それが全然葬式の時の歌のやうな悲哀の調子に響いた。歌ひ終つてベシーは、

「あれ、ジエーンさん、御泣きなさるなよ。」と言つたが、それは、火に燃えるなど言ふのと同様の注文であつた。併しベシーに、如何してジエーンの病的の心の苦悶が解ろうぞ。

晝飯前にロイド君が見えて、室へ入りながら、「オヤ、もう起きたのですね！ 乳母さん、どんな様子です。」と尋ねた。

「ベシーは、病人は工合が宜いらしいと答へた。それなら、もつと元氣がありそうなものだに。ジエーンさん、此方へ。ジエーンといふ御名でしたね。」

「えい。ジエーン・アイアです。」

「あなた、泣いて居ました。何を泣いて御出のでした。苦しいところがありますか。」

「いゝえ。」

「皆さんと御一所に、馬車で出られないので、泣いていらつしやるのだと存じますよ。」とベシーが横合から口出した。

「まさかそんな詰らぬ事に泣く年ではありませんね。」

「ジエーンも真にそうだと思ひ、ベシーによい加減な言掛けを言はれて、自尊心を傷けられたのが口惜しくて、

「そんな事で泣いた事は未だありません。馬車で出るの大嫌ひ。私や辛く悲しいから泣くの」と敏速と答へた。

「まあ、ジエーンさん」とベシーが言つた。

「藥劑師は惑つたらしく、前に立つてゐるジエーンを熟々として見て、

「如何して昨日病氣になつたのです。」

「御轉倒なすつたのですの」とベシーが、再言葉を挾んだ。

「轉倒ぶ！又しても赤ン坊見たやうではありま

せんか。」「其年頃で、歩けないのですか。八歳か九歳でせう。」

「轉ばされたのです」とジエーンは、又も辱めを受けたのが忌々しくて、膠もなく辨解の句を弾き出すやうに言つて「でも、そんな事で病氣になりはしません」と言ひ添へた。ロイド君は嗅烟草を一撮取り出して、鼻へ持つていつた。而して烟草の箱を衣囊へ戻す途端に、召使共の食事の鐘が響いた。ロイド君は、それと心付いて、

「あれはお前さん方のだね。下へ行つて宜しい。御前さんが来るまで、ジエーンさんによく言ひ聞かせておくから」と言つた。

ベシーは、其處に居たさうだったが、此邸では食事の時間が非常に厳しいので、止むなく下りていつた。

「轉んだ爲の病氣でないとする、何で病くなつたのです」と、ロイド君は前の續きを追ふた。

「お化けの出る部室へ、暗くなる迄押し込められ

て居たの。」

ロイド君は笑顔と鬘しかつ顏とを同時に見せて、
「お化け！ やつぱりあなたは赤ン坊ですね。お化けが恐いの。」

「リード伯父さんのお化けは恐いのよ。伯父さんは、あの室で死んで、あすこに置いてあつたのでせう。ですから、ベシーだつて誰だつて夜は、成丈、あすこへ行かぬやうにして居るのに、私をあすこへ入れるなんて眞ほんに非道い。たつた一人で、而して燈火あかりもないんですもの。あんまり非道いから、一生忘れやしない。」

「馬鹿な！ 辛く悲しくつてといふのは、其でなのですね。今此の晝間でも恐いかね。」

「いゝえ。ですけれど、今に又直ちきに夜になりますの。而して、おまけに私や不幸なの——ほんとに不幸なの——他の事で、」

「他の事ツてどんな事？ 少し話して御覽なさいな。」

ジエーンは返答がしたくて堪らなかつた。が、何と答へてよいか困却した。子供といふものは、感じて、その感じを分解することが出来ない。

よしや幾分分解する事が出来ても、其結果を言語に言ひ表はす術すべを知らない。併し、ジエーンは、人に告げて、自分の心の苦を減らす此唯一の好機會を免すまいとの一心で、暫時どぎまぎした揚句に、一の答を——言ひ足らぬながらも偽りのない返答を——案じ出した。

「一つには、父さんも、母さんも、兄弟もないから。」

「優しい伯母さんと、従兄弟いとこがありません。」

ジエーンは一寸黙したが、又無細工ぶさいくに陳述した。

「でも、ジョンが私を轉ばせて、伯母さんが赤室へ押し込めたのですよ。」

ロイド君は再、烟草を引出した。

「此家は立派でせう。こんな家に居るのは、結構ではありませんか。」

「でも、私の家ではありませんもの。アボットは私は女中よりも下等で、到底こんな家には居らぬのだつて言ふんです。」

「何だそんな事？こんな立派な家を、出たいなんていふ詰らない事を、思ひはしないでせう？」

「他に行き處があれば、嬉しがつて行きますけれど、大人になるまでは、此處を出られないの。」

「出られるかも知れない——其は分らない。此家の奥さんの他に、あなたの親類がありますか。」

「いゝえ。無いでせう。」

「あなたの御父さんの方のもの。」

「知りません。先に伯母さんに伺つたら、アイアといふ貧乏な、下等な親類があるかも知れないが、一向知らないと仰つたのです。」

「若し、さういふ親類があつたら、其處へ行きたいと思ひますか。」

「ジエーンは考へた。貧困は大人にも不快なも

のだが、子供には猶更で、子供は勤勉な労働社界の感すべき貧のあるのを知らず、貧しいといふ語は、直ちに破れ衣、不足の食物、火のない爐、下劣な舉動、厭はしい悪行を連想させるのである。ジエーンには、貧困は墮落と同じ意味に思はれるので、

「いゝえ。貧乏な人の處へは行きたくないの」と答へた。

「いくら親切にして呉れても、」

「ジエーンはやはり首を振つた。貧窮の人はどうして親切な事が出来やう！且又、貧乏の人の口のきき方を覚え、その人達の行儀を真似て、教育もされず、子供の守だの洗濯だのをしてゐる此村の御かみさん達のやうになるのは——否や、地位といふ高價を拂つてまで、自由を買ふ勇氣はないと考へた。」

「あなたの親類つてそんなに皆貧しいのですか。労働者なの？」

「どうですか。伯母さんは、若し、私に身内があれば、乞食に近いやうな者に違ひないと仰るの。私や乞食には、なりたくない。」

「では、學校へ行くのは如何です。」

ジエーンは再び考へた。學校とはどんな處だか一向知らない。若い女の人が、足枷をはめて、後板をつけて、上品に堅苦しくしてゐる處だと、ベシーが話してくれた事がある。而してジョン、リードは學校が嫌ひで、先生を悪く言ふが、ジョンの嗜好が自分のと同じ譯もない。ベシーの話は何だか恐ろしいけれども、又生徒が種々の技藝を習ふのだといふから、其點は面白さうでもある。ベシーの以前奉公してゐた家の娘さん達は、景色や、花の畫を上手に畫き、歌も唱へるし、樂器も弾けるし、御金入も編めるし、佛語の本も讀めると、ベシーが自慢して聞かせるので、自分は羨ましくて堪らなかつた事がある。其上に、學校へ入るのは、全然違つた處へ行くので、長い旅をする譯で

あるから、この家とはすつかり離れて、新しい生活に入るのだ——と思ひ定めて、いよくの斷定を言葉に現はして、

學校へなら行きたう御座います。」と言つた。

「さうか、さうか。そんな事が出来るかも知れませんが。」と言つて、ロイド君は立ち上り、此子には氣を換へさせる必要がある。神經がどうかしてゐる。」と獨語して居た。

ベシーは、戻つて來た。其と同時に、馬車の音が砂利道に轟いた。

「あれは、奥さんですか」とロイド君は尋ねた。「歸りに一寸御話したいから。」

ベシーは先に立つて案内した。

ロイド君とリード夫人との會見で、ロイド君がジエーンを學校へ遣つてはと言ひ出して見たところ、夫人が造作なく同意したらしく、アボットがある夜、子供部屋へ來て、縫物をしながら、ベシーと其事を話してゐた。

(床にゐるジエーンはもう眠つて居ると思つて)

「えい。奥さんはあんな厭いやな子の厄介拂やくわいをするのですもの大悦びでサ。あの子ツてね、始終人の瑕あざを探して、蔭で何か企圖たくらんでゐるやうな風ですよ。」

ジエーンは、アボットの口から、自分の父は貧しい牧師で、母は一族の望みに背いて、此人に嫁した爲に、母の父は怒つて、一文もんの金もやらずに追出してしまつた事や、父と母とが結婚してから一年後に、父はある盛な工業地の貧民窟を訪問してゐるうちに、其地に流行してゐたチブスに傳染した事、母がまた同じ病に罹つて、兩人とも一ヶ月を隔てずに病歿した事などを、始めて聞き知つた。

「ベシーは、この物語を聞き了つて、歎息して、
「ジエーンさんだつて、可愛いさうだね、アボットさん。」と言つた。

「え。あの子が良い、奇麗な子なら不仕合を哀

んでやつてもよいけれど、あんな子を可愛い、なんと思はれやしません。」

「それや、ひどく可愛い、事はないさ。あれがデヨーシアナさんのやうな美しさで、今の境遇にゐるのだと、もつと哀れが深いのですがね。」

「そうですよ。私や、デヨーシアナさんは實に可愛いと思ふ。縮毛が長くて、碧眼あそめで、而してあの顔色の美しさ、畫にかいたやうですもの——ベシーさん御夕飯の御馳走の匂がする。」

「ほんとうにね。さ、行きませう。」

二人は出て行つた。

今日の常會

今月の常會には本誌廣告の通り巖谷小波氏の有益にして趣味多きお話があります。本會はお一人でも多くの方に益を頒ち度いと思ひますから、皆様お誘ひなまつてお出で下さい。

子供の肺炎について

醫學士 石塚保吉

肺炎は、子供には随分多い病氣である、殊に此頃は大分多いやうである。肺炎の中にも二通りの區別がある。一つはクルツブ性で他の一つはカタル性である。クルツブ性のは數も少く危険も少ないが、カタル性のは非常に數も多く、危険もまた多いやうである。

カタル性肺炎は、風邪が進んで肺を犯したもので大人よりは子供に多い病氣である。子供の中でも小さいほど多くて危険である。風邪が此病氣の原因であるから、風邪位と侮つて打ちすて、おかぬやうに風邪の時に十分に注意せねばならぬ。風邪をひいた時はなるべく早く醫者の治療を受けるがよい、風邪をひいた時に入浴をさせたり、外をつれあるくなどは最わるい。厚着をさせたり、ゆ

たぼを入れたりするのが原因になる事もある。病氣の兆候は咳が出て熱が非常に高くなる、呼吸がせわしく脈搏がはげしくなつて非常に苦しむ、甚しいのは唇が紫色になる、此場合無論直に醫者に見せなければならぬがさしあたりの手當として、濕布と吸入と室内の溫度を高める事との三つの大きな條件になつて居る。

濕布はやわらかい木綿のきれを三重か四重にたんで、冷水にひたしてかたくしぼつて胸にあて、その上に油紙をあて、ふらんねるをまくのである、熱の模様によつて、二三時間毎に之を交換するのである。部屋の溫度を高める事は、注意して晝夜間斷なく、やらなければならぬ。夜の間に火が消えて、俄に溫度が下つた爲めに、折角なほ

りかけた病氣が再發したなどの例は少くない。いくら蒲團を多く着ても、その部屋の空氣が冷くても何の役にも立たぬのであるから、火鉢でも、ストーブでもたいて、よく室内の空氣をたゝめる事が必要である。但し温めるだけでは空氣が乾燥するから、洗面器の中へ水を入れて其上におき、始終空氣の中に濕氣をもつやうにせねばならぬ。さうしてもまだ空氣が乾いて苦しいから吸入をやるのである。吸入は通例百倍の食鹽水か重曹水か、或はそれを兩方混合したものを用ゐる、三時間に一回位吸入器に附屬した杯に二杯位づゝやるのである。

我園の郊外保育に就きて

神戸幼稚園保母

佐藤 ます

ずつと重症になると以上の手當だけではとゞかなくなつてくる、平和の手段では快復がむづかしくなる。今にも陥らんとする危険を救はんが爲めに胸に芥子を塗るかまたは芥子の湯をつかはせる事がある。之れは一考へると殘酷のやうであるがこれによつて九死に一生を得た人が多くある。荒療治ではあるが、さういふ場合にはかはいさうだなどと云はずに、斷然敢行した方がよい、屹度助かるとは云へないが十中八九位は助かる。新しい治療法で命が助かるのであるから、試むべき場合には、必ず斷行するがよろしい。

婦人と子供第十三卷第十一號に保育と自然知識と題して當市保育會計劃の博物講習に於ける一ヶ

年間細目を記載せられてより、近來各所に於て種々の議論起れりと聞く。元より其内容の如何は知

るによしなけれども、之が爲に議論の生せんとは思ひよらざりし事なれば、其議論の内容如何に係はらず、参考のために我園に於ける實際の事を少しく左に記する事とせり。

細目は元より保母の便宜のために、作りしものにして、自然の中に幼児を置き、自然に接觸せる間に、幼兒等の旺盛なる質問に對して満足せしめ、之に適當なる誘導を與へんには、豫め先づ保母の自然物に對する確實なる智識を要する事を俟たず。是に於て、一ケ年間の動物植物礦物を季節に應じて各月に割當て實物を以て研究するに便ならしめしものにして、幼年部年長部の區別たてしは其うち長初互に適當と認めしものを區別せしものなれば、必ずしも各月細目のまゝに注入教授せんとするものにあらざるなり。

されど幼兒の發問を尊重し如何なる質問にも應ずる準備なかるべからざるを以て、九月以來尤も盛に郊外保育を實施し來りしが、幼兒を新らしき

場所に誘はんとする前日には必ず保母先づ其場所に至り動植物につきて實地研究をなし、如何なる質問にも應し得らるゝまでに努力するを以て常とせり。是れ大なる自然の中に唯遊ばしむる事は體

育の上にはそれだけに最も良き方法なるも、折角豊富なる智識を等閑にし、徒に植物を踏み躪り、小動物を虐待するに任ずは保育の道にあらざるを以て、漠然たりと見ゆる大なる自然の中に面白き自然ある事を悟らしめん爲、各組各豫め目的を定め雜草にても無意に摘みとる事を避け、或時は數札を與へ數に重きををきて採集せしむる場合あり、一種の植物の名稱を覚えしめ之を採集せしめ臺紙に貼りて保存せしむる場合あり、又は之を材料として何物をか制作せしむる場合あり、又はまゝごと材料となさしむる等あり多種類を採集して之を分類せしむる場合あり、昆蟲をとりては益蟲害蟲を教へ又名稱區別等を知らしむる事あり、或は全く自然に採集せしめ幼兒よりの質問を俟つ場

合あり、かくする時は一回より一回毎に幼児等の興味を生し採集種類の分量を増し質問の數を加ふる等著しき變化を見從て體育上の効果も増進し、家庭に於ても趣味を生じ、園外保育を喜び幼児の缺席も亦減少するに至れり。

今その實況の一例として去年十月二十四日京都より檜崎文學士の心理學講師として來神せらるゝを好機とし、大阪神戸の幼稚園主任者をも招き口一里山に全幼兒を誘ひて實施せる實況を記さん

に、其の日午前九時園庭に幼兒各々辨當を携へて整列し各受持保姆手帳に人員を控へ使丁はゴザ、茶碗等を調へ全く準備了りて一の組より順次出發す。武徳殿を過ぎて諏訪山の後にかゝれば路上の砂ほこり舞上りて衛生上甚だよろしからず直に二隊に分ちて一は妙見山に道を變ず。行く事十町餘にして山又山の坂路に達す幼兒等は更に倦怠の色なく或は唱歌を歌ひ或は道の兩側に咲亂れたる花をさしては之は菊之は秋のキリン草之はヤクシ

草之は何之は何なりとて登り行く様樂しげなり。二十町餘にして目的の地に達す。茲は一面の草原なれば各組思ひ／＼の場所を撰びて圓陣を作り座を占めて暫時休息す。かくて五六の尤も幼き組は全く自由に遊ばしめ四の組は保姆先づ犬蓼を示して其名稱を教へ各兒に云はしめ全兒名稱を覺えたる後新聞を興へて籠を摺ましめ犬蓼を採集せしめて此籠に入れ自由にまゝごと遊をなさしめたり三の組は幼兒の已に知れる草をとらしめ之を臺紙に貼らしめしに秋のキリン草、コンギク、ネズミノヲ、カハラナデシコ等の類なりき二の組は幼兒の自由に採集したる草を以て之に糸、紙、のり等と興へて何物をか製作を工夫せしめたるに又紙を以てちりとりを摺み萩、すゝきの類を雜めて糸にて括りほうきとなせるものもありリンドウ、コンギク、リユノウギク、アキノキリンソウ等重に花類をとりに臺紙に貼れるもありき。一の組は各兒に各一種の草をとらしめ之を分類せしめしに犬蓼、ワラ

ビ、ウシノケグサ、エノコログサ、ツリガネニンジン、リユノウギク、コンギク、ネヅミノヲ、エビヅル、ハギ、リンドウ、ス、キ、秋ノキリンソウ等ありて此等の名稱を幾度か全幼兒に云はしめたるに尤も多く記憶せらるゝものは犬蓼、ワラビ、エビヅル、ネヅミノヲ、エノコログサ、ウシノケグサ等にして尤も忘れ易きはコンギク、リユノウギク、リンドウ等なりきかくて思ひ／＼に遊びやがて十一時にもなりたれば元の圓陣を作りて辨當を喫し後自由に遊ばしめしに山に登る者阪をすべる者草をとる者蟲を追ふもの思ひ／＼の興を盡し午後一時歸途につけり此遊に付檜崎先生の批評の梗概を記せば左の如し。

幼稚園日記(二)

私は是等の子供を研究するのは極めて興味ある

一、體育の上より見て 幼兒を山野の清潔なる空氣中に伴ふは有効なり。

二、智育の上より見て 途中の幼兒互の談話は言語發達の上に効多く自然物の名稱を教ふるに尤も適當なり。

三、情育の上より見て 自然物に對する趣味の養成に利ありと。

右は郊外保育實況の一部を示せるものにして未だ其意を盡さず從て充分なる參考となる能はざらんも幸に同感の諸氏にして既に實行せられし所又は研究中の所感等誌上に發表せられ我保育界のため一臂の力を添へられん事を切に希望して止まざるなり。

リローン、ハーデイ女史著
田 中 生 抄 譯

事であるといふことが分りました、そして以前に

は全然分らなかつた次の句の眞意が分つて來ました。

經驗は同情を産み、同情は理解を産み、理解は愛を産む、而して愛は有用の手を引き導いて無限の勢力の門を開かせる。

私は私と一緒に働いてくれる自發的の援助者を得たいと大層望んでゐました。幼稚園事業は満足の出來る仕事でありませぬ、而して探してみたら随分斯る仕事を天職として居られる婦人があるに違ひありません。

クリスマスには特に幼稚園の催に係る式を教會内で行ひました、而して兒童の母親達も招待されました、兒童は既に習つた遊戯の中のあるものを行つて見せました。茶話會を濟ませてから兒童が手傳つて飾り附けたクリスマス樹に火を點じました、木に吊るしてある贈物としては兒童が各その母に贈るとして拵へたわづかばかりの小さい物があつたばかりでございます。

幼稚園一同へ對して贈られた玩具が持ち出されました、而して小さい玩具は兒童が貰つて歸宅いたしました。

兒童は斯る集りを滅多にした事はありませんでした、而して私達はもう解散しませうといふ暗示を三四回行つてみました。利目がありません、そこで帽子とジャケットを取出して辛うじて解散の意を悟らせなければなりません。母親の或者などはさよならとさへも云はずに歸つて行つて了りました、併し數週間経つて後母親の一人はあの集りは今まで行つて見た中で一番よかつたと言ひました。

クリスマスは幼稚園の兒童に依つて大層楽しく祝はれました、降來節の間兒童等の小さな仕事のすべてに通じて流れてゐた主なる者はクリスマスに對する準備といふことであります。

最年長の兒童といふのがたつた四年六ヶ月であ

ります、それでクリスマスは一人も前から知つてゐた者はありませんでした、又誕生日を祝ふことをさへ覺えて居りませんでした。

兒童等がクリスマス祭の觀念に對して表現を見出す所のクリスマス樹や飾物や南京花火やサンタクローズや贈物の贈與や其他いろ／＼の小さな事柄は兒童等に取つては皆新しい喜びでありました

クリスマス前夜の茶話會に於ける莊嚴の瞬間は蠟燭に火が點され、兒童が各自小さい繪のカードを樹から取つて母に渡す時でありました。繪のカードは種々手を盡してあり幸福な豫言が記してありましてまわりには縁が縫取つてありました。

兒童の或者が降來節の間に、クリスマスにはエス様に花を買つて上げやうと申しました、花を買ふ爲めに半ペニーブー皆から集めやうといふ動議は快く諾はれました、而して母親達は兒童が寄附を濟ませて了ふまでは安心が出来ませんでした。

クリスマス朝には小さい團體はその勤行をす

るため花を持つて教會に繰込みました。

子どもの歌を唱ふ兒童の小さい聲は力弱くありました、而かも兒童の敬神の念はサイドチャベルで通常あらはされる様なものとは較べ物になりませんでした、併し誰でも全力を盡して正真正銘に敬神の念を現さうとします。

一九〇七年二月――兒童の花園には始めて花が咲きました、可愛らしいスノードロップの花が一輪一月の十六日に咲きました、兒童は去年の十一月、その球莖を見せられた時には兒童の覺束ない興味はそんなもの食べられないといふ發見によつてすつかり失はれて了ひました、併し灰綠色の芽が出て日に日に延びて行き白い荅がそのシヨールから顔を出し漸次上の方へ向つて成長し遂にスノードロップの花となつた時それは珍らしがられ愛される様になりました。

或朝お祈禱の間に例の通り行列勤行が行はれま

した、而して貴き第一の收穫は集められ運び込まれ主エスのテーブルの上に置かれました、而して恭々しくその造り手に捧げられました、これに續いて兒童等はその時に適した讚美歌を唱ひましたその讚美歌は幼稚園とことわつてはありませんが幼稚園組織に關する理想を現はしたものでありました。

氷や雪を溶かすべく

緑の葉をば解ほどれしむべく

スノードロップを育つべく

神はかっやける暖き日光を送る。

我等の善行を育むべく

神は我等に愛を送る

花園に生ふる花の如く

我等は愛らしき者とならん。

幼稚園の目的は智的教育を與へることではなく兒童の天賦の能力をして種子が自然にほぐれて平つり衝あひよく發達し熟練せる園丁の手に依つて花を咲か

せる様に、純なる完きものとならしめるために適當な周圍と刺戟と保護とを與へることであります奉獻祭の爲めに數種の花を教會へ運ぶ必要がありました、けれども相憎霜かが降りたのでその事は駄目でした。併し兒童等は皆カノンゲートのとある花屋へ押し掛けて行きました、而してエス、ポールの日は大層よくお祝ひが出来ました。

勤行が濟んでから教會で人形の茶話會が開かれました、而して兒童等は今では又何日幸福いっな日が來て再び教會へ行けるでせうと聞きます。

一九〇七年三月——私達は花園で大層骨を折つて働きました、兒童の父親で或朝朝寢をしたものがありました——市街掃除人は或る一定の時刻に遅れると仕事が他の人に與へられて了ふのです、私達はその人を雇ひました、その人は私達に時間の餘裕を持たしてくれる様によく働きました。

その人は鶴嘴とシヨベルを使つて働きました、

私は篩ふるひをふるひました、それは非常に骨の折れる仕事でした、何故ならば土壌の四分の三は大小様々の石塊で八分の一は燃屑や廢發や古びた油布などでありました。

私は深さ二呎に掘り下げ底に芝土を敷きそれから篩にかけた土と兒童等が街で拾つて來た馬の落し物とを入れました。

これを一旦皆掘り返して私達は眞個の善い土を數吋敷き延べました。

石塊や廢物や庭の隅の低くなつた所を埋めるために用ゐられました。そして此所は兒童等の輪つなぎをして遊ぶ場所となりました。

この花園といふのは教會の裏にある荒れ果てた地面の一部であります。

其處には極く近頃まで古い家が立つて居りました。町では其處を空地にして置くつもりでその家を買上げて取り壊したのであります。

當局者は年に一志の約定でこの空地の使用を許

してくれました、而して技師は大層親切を示して種々手入れをする事や室の窓を暗くする柵を取除くことなどを許してくれました。

四周の家々に住む人達は塵芥箱を拵へて置くにも係らず何でも窓から外へ投げ棄てました。私達がそれを轉倒してみましたら雑多な木屑、缺け鏝、古い錫罐、古靴、帽子、鯨骨、骨、馬鈴薯の皮犬の死骸二つ、猫の死骸一つなどが取散らかつて居りました。

園長は人を雇つて是等の塵芥を一所に集めさせました、而してこれを取り除けるために一臺に附八志(人の賃銀は別として)を拂つて掃除人の車を三臺雇ひました。

私達は一部分を掘つて十一月に數個の球莖を植ゑ附けました、併し私達は餘りそれに注意しませんでした。

ローリー氏が教會の若い人を三四人手傳ひに來る様にして下さいました。

私達は五六回土曜日に大仕事をしました。兒童の父親や大きい兄さや姉さんや又阿母さんまで皆一緒になつて熱心に働いて下さいました。而して私達は皆確かにそれをするのを喜んで居りました。皆が一緒に働いてゆく中にはお互に悦ばしく思ふ所の自然の人情がありました。順番に道具を受取つて仕事をするといふ事は私達を親密にさせました。而して斯る親密の深さは他の何物によつても求むることは出来ません。

四周の家の人達は相變らず雑多な廢物を投げ棄て、私達をひどく苦しめました。

私達の上の家に住つてゐる婦人達は私達の庭を丁度い、塵芥拾場位に思つてゐるらしくこゝに記

すことを憚る様なものをさへ上から投げ棄て、よこしました。

注意深い人が夏になると屹度臭くて鼻持ちがならぬであらうと申しましたがまつたくさうでせう。

裏町の子供を保護して下さる特別の天使は其邊に散つてゐる硝子屑で怪我などをしない様にして下さいました。併し私達は硝子屑を集めるのには飽き飽きしました。

窓から鏝を投げ出すことは何でもありませんがこの破片を拾つて集めるのは容易なことではありません。

保育入門 (二)

二 幼兒の教育

—
幼児の生活は教育を要求して居る。しかしながら、どんな教育が與へられてもいゝと言ふ譯ではない。幼児の教育は一つの特別な性質を具ふるものである。

教育の範圍は極めて廣い。従つて其の種類別も種々の立場からすることが出来るが、左に、幼児教育の性質を明かにする最も必要なる類別を考へて見る。

教育を受けて居るもの、即ち被教育者が、教育を受けつゝありといふ意識を有せるや否やに就て二種の別を立てることが出来る。狹義の教育、即ち學校教育に於ては、高等なる學生は勿論、最下級なる小學兒童と雖も、自分は教育を受くるために學校に來て居るといふ意識を有して居る。言ふまでもなく其の教育といふ概念は随分區々なるもので、小學一、二年生の場合などでは、殆んど教育の概念を成さぬ程に簡單なものである。また其

の意識も極めて淺く弱く不明瞭なるものである。

しかも彼等と雖も教場内の自席に着て、或は教科書を繙き、或は練習帳に對した場合に於て、之れより物を學ばんとしつゝあるなりといふ意識は有して居る。少くも、其の意識を彼等に要求するところが適當で、また其の意識を喚起する必要もあるのである。

此の意識に對して、教育者は課業を課することが出来るのである。三十分間なり五十分間なりの有意注意を要求し、それ／＼の努力をなさしめることが出来るのである。勿論充分に兒童の興味を利用し得る時には一々斯くの如き意識に訴へるの必要はないことになる。しかし。多少とも課業の意識を要求することは、學校教育に於て一般の必要といふことが出来る。

ところが、學齡前の幼兒は、斯くの如く課業の意識を要求することに未だ不適當なる時期にある彼等の生活は總べての瞬間に於て、常に其の生活

それ自らを目的とし、その生活それ自らからの満足を求めて居るのである。他の第二の目的のために生活し、また其の結果の満足を待つといふ様なことは、幼児にはまだ出来ない、

課業の意識のない生活は、すなはち遊戯生活である。遊戯生活が如何なる性質を有するかといふことは別に説くとして、之れを課業と區別して見れば、課業に於ては結果が目的とせられ、遊戯に於ては、それ自らが目的とせられて居るといふことになる。すなはち、此の意味に於て、幼児の教育は、非課業的にして、遊戯的でなければならぬと言はれるのである。

二

遊戯的であるといふことを完からしめる爲めには、幼児の自己活動を尊重する必要がある。勿論被教育者の自發性を利用することは、總べての教育に於て必要有効なることであるが、幼児教育に於ては、殊に大切なることである。而して總て

の方面に自己活動を充分ならしむるためには、成るべく外部からの干渉を避ける必要のあることは勿論である。干渉には二種あつて、たゞ壓迫し、強制するばかりが干渉ではない。其の種の干渉が幼児の自己活動を害するは言ふまでもないが、他の種の干渉、即ち餘り指導の過ぎ、世話の過ぎるのも、自己活動をして真に自己活動たらしめる爲には有害なることである。要するに、幼児をしてつとめて其の自由に委して置くといふことが、自己活動を完全存分ならしむる秘訣である。

但し、自由に委すといふからとて、たゞ無意味なる放任でないことは勿論である。既に教育であり、教育者が存在するのである以上、有意的、成案的の作業であることは、一切の教育の通性であつて、幼児教育に於ても變りはない。すなはち自由といふも、有意的成案内にあつての自由である所謂放任とは根本的に意味が異なる。

三

すべての教育の目的は、訓練教授の三つに亘つて居る。要するに體育、德育、知育であつて、身體、品性、知性の發達を目的とすることに於ては幼兒教育も同様である。たゞ學齡以上の教育に於ては、其の教育の方法が、此三目的に對して、それ／＼分れて行はれて居る。勿論教育竟極の目的は品性陶冶にあつて、すべてのことが品性陶冶に無關係ではあり得ないものであるが、しかも養護は養護として、教授は教授として、獨立の目的のもとに夫々の方法が行はれるのである。殊に高等の教育になると教授が特に専ら行はるゝ様にさへなる。之れに對して幼兒教育に於ては、養護、訓練、教授が、決して分れて離れて行はるゝことはない。換言すれば、教育としては身體、品性、三方面の發達を目的として居るけれども、幼兒の生活は未だ、そこまで分化せらるゝに適して居ない従つて其の教育も、そこまで分化せらるゝことなく、たゞ混然たる全體の教育として行はるゝに止

まる。詳しく言へば、幼兒の教育は常に教育の三方面に涉らなければならぬのであつて、殊に其の一つを目的とした特殊な教育方法を行ふことはないのである。

此のことを他の言葉で説明すれば、幼兒教育は常に幼兒の生活全體を其の對象とすべきであつて今は其の知性のみは對象とし、今はその情性のみを對象とするといふ様なことは、決しなされないといふことになる。即ち、全生活から或る一面を抽象して對象とするのでなくして、全生活が常にそのまゝに、即ち具體的に、教育の對象とせらるゝのである。

之れを幼兒教育の具體性と名づけて置く。(後に尙詳説する處あるべし)

四

幼兒の教育をやさしい教育だといふ人がある。

之れは、教育を其の教授する教材の難易から分けた見方の言であるが、其の難易は客觀的標準によ

つての差で、之れを受くるもの、主観からいへば、すべてが自分の程度に適合したものである。小學校の教科書を中學生に教へたならば、それこそやさしい教育である、しかし、小學校の教科書を小學生に教へるのは、少しもやさしい教育でない。

之れは教材即ち教授の方面を例をとつたのであるが。幼兒に適當なる教育は、小學生、中學生にとつてはやさしい教育であるかも知れないが、幼兒自身にとつて 決してやさしい教育ではない。前に述べた通り、幼兒教育は非課業的で、遊戯的だといふ點からいへば、如何にもやさしい、冗談事の様にも聞えるのであるが、それは遊戯的といふ正しい學問的意味にはづれたことで、力一ぱいに遊んで居る時に、幼兒は充分眞面目な努力をして居るのである。所謂一生懸命なのである。吾々成人が娛樂としての遊戯に於て、極く軽い意味の生

活をして居るとは、全然相異つて居る。充分の緊張、充分の熱注、充分の努力、は幼兒の良き遊戯の必有性であつて、之れを他の標準から見ても、やさしいことをして居るといふのは、大いなる誤謬、思はざるの甚しいものである。

此のことは、更めて論ずるを要しない程に明かなる筈であるが、實際は屢々誤解せられて居る。たゞに傍觀者から誤解せられて居るのみならず、幼兒の教育者なる、母、姉、又保母にさへも、考へ違ひせられて居ることが尠くない。

重ていふ。幼兒は其の生活の自然の要求に應ずる適當の教育を與へられて居るだけで、決して彼等にとつて、やさしいことを與へられて居るのではない。之れは幼兒教育の特質として常に誤られて居ることであるから一言して置く必要がある。



マレーベル自傳 (第二回)

(マイニンゲン大公に宛てたる書翰)

倉橋惣三 譯

六、幼時の價値

茲で私は一寸記述の筆を休めて少年時代の事に就て更に長く書くべきか否かを考へて見ませう。

さりながら此頃は私の生命の木に若芽がほぐれ始めて來たのです。私の心が其の回轉期を見出したのです。そして私の内的生活は此頃始めて目を醒したのであります。

されば、若し私が幼き少年期の正確なる記述を成し得るとしたならば、私の生活に對する正しき理解と、人としての働きに對して缺くべからざる幫助を得るでありませう。

斯ういふ譯で私は私の此の時代の事に就て特に

長く書かんことを敢てするのであります、後年の事を省略しても此の時代のことは詳記したいのであります。

私は自分の生涯を批判したり記述したりしてゐる内に一般世間から平凡又は不必要として排斥せられてゐるものが、自分の眼からは反つて一番重要なものであるといふ事が分つて來ました。教育に就ても丁度これと同じ事が言はれるのであります。

私の管見を以てすれば、幼稚な基本的な事柄を輕々に看過するのは甚だ宜しくない事だと信じます。併し餘り瑣事にばかりかゝづらつてゐて全幅

を一瞥し其の狙所を看取する事が出来ない、讀者は遂に忍耐力を疲らして了ふといふ事を私は知つて居ります。それ故私は閣下（註曰、フレーザーが此書簡を宛たるマイニンゲン大公をさす）が先づ兎も角これをお読み下さる時、長きに過ぎ或は煩瑣に過ぎると思召された箇所があつたならば、ズン／＼お通り過ぎ下さる様に願つて置きます、

七、二つの讚美歌

却説、私は父が其地方の牧師をしてゐた爲めに規定外れに女學校の入學を許可せられました。同じく父のお蔭で私は同年輩の生徒の中に編入されず、教師と關係の深い生徒の中に入れられませんでした。それで私は大きな女生徒の中に割込んだのです。

私は自分に出来る範圍で女生徒と課業を共にしました。皆に附隨つらひいて一緒に行つて行ける事は二つありました。先づ私は彼等と共に聖書を讀む事が出来ました。それから前述の下級生等のする様

な經句の暗誦の代りに、私は次の日曜日の勤行のために讚美歌を一行宛學ぶのでありました。

是等の讚美歌の中二つは私の少年期の初に於ける陰鬱な暗澹たる黎明を二つの星の如くに光りました。それは「めさめよ、わが魂」と「神の子たるは難きかな」でありました。是等の讚美歌は私に取つては生命の讚美歌でありました、私は私の小さい生命が其處に現はされてゐるのを發見しました。

この讚美歌は深く私の心に止つてゐて後にはこの讚美歌が私の心靈に運び來つた使命の中に氣力と援助とを發見しました。

八、父の教へ

私の父の家の生活は學校のこの訓練とはよく調和しました。祈禱は日曜日には二度づゝ行はれましたが私は何時も缺かさず出席しなければなりませんでした。

私は非常に注意して父の説教を聴きました。それは父が自身の位置、職業、生活等に關して種々

のほのめかしを其説教の中に交へて居る様に思はれたからであります。

今から考へて見ますと其頃私が法服所に入込んで勤行を聴いてゐたのは、甚だ利益たぐになつたやうに思はれます、何故ならば靜に法服所に入り込んで會衆から離れて居ると、自然注意力が散漫しなかつたからであります。

私は既に父が舊希臘派の神學を奉じてゐた事を記しました。それがため父が讚美歌や説教に用ゐる國語は神秘的な象徴的なものでした。——私は父の演説を多くの意味に於て「石の國語」ストーンラングエージと名付けませう。といふのは其言語を通してその中に含まるゝ意味を了解するには非常に骨が折れたからであります。

けれども、もつと成長してから、全力を盡しても尙且達し得られない様なことが、或る單純な思慮深き、若き心の快活な、覺めたる生氣を與ふる様な力に依つて、又力を盡して總ての物の原因と

關係を尋ね求むる熱心な若き心に依つて屢々完成せらるゝものであります。

但し斯る心掛の若き人々さへも珠玉にもかへ難き或物を得るには長い間の考究と調査と反省とを経なければなりません。私が夢中になつて求めてゐたものを發見し得た時には實に溢るゝばかりの歡喜を覺えるのであります。

私が成人してゐた時分殊に私が少年期を過してゐた時分の四圍の事情は私の官能を早くから激甚に働かせる様にしました、それ故官能の快樂といふことは最初から私の緻密な思索の題目でありました。

少年期の初期に於ける分解的な究問的な習慣の結果は甚だ明晰で且つ決定的でありました、そして之を言語に現すことが出来ないにしても心の中にはしつかりと決められてゐたのであります。

私は刻々に移行行く官能の快樂は吾人に永久的な飽滿的な影響を與へるものでないから餘り夢中

になつて之を追求すべきものでないといふ事を悟

りました。究問的な考究、心と外界の比較及び心と外界の仲介物の研究、以上三者を私は目下未來の根柢として居りますが丁度それと同じ様にこの確信は當時私の全人格を決定しました。

不斷の自己靜觀、自己解剖及び自己教育は極く最初から私の基礎的特性でありました。そしてこれは極く最近まで續いて來たのであります。

催促されずに自分の教育に身を入れる様に人類の快樂と能力とを向上し鼓舞し覺醒し強固ならしむることが常に私の教育事業の基礎をなす所の主義でありました。

私は地獄に行くべき運命を擔つてゐる者でないと充分満足し得る様に自ら信じた時私の喜びは非常でありました。

私は幼くして希臘派神學の石の様な難澁な教義を解釋し去る事が出來ました。これには次に述べる二つの事柄が多分原因になつてゐるだらうと思

ひます。

第一に私は習つた事をよく覺える爲めに、父が自宅ですてくれる授業を聽く習慣だつたので、是等の教義を幾度も幾度も聞きましたし、其他種々の場合に於て度々是等の教義を耳にしましたため、私の心は殆ど無自覺的に是等に對して或る解釋を下してゐたのです。

第二に、私は屢々父が牧師の職責を嚴重に履行して行く様子を默視してゐましたのと、それから又、父の意見を聞き又慰言を得るために訪ねて來た人が、父と話してゐるのを屢々傍に在つて聽いてゐたからであります。

私は斯くて絶えず外的生活から内的生活に引附けられてくゐるのでした。

九、性の疑問

何等の解釋をも加へられない裸のまゝの人生と、其上に加えらるゝ父の解釋とが自然私の頭の中へ入つて來ました。斯くて物象と言語、行爲と象徴

とは極く明瞭な關係を以て私に理解されました。

私は五千の生靈より成る此の村に於て、眞摯な嚴格な牧師の監督を受けつゝ、人々が身體を粉にして重荷づけられた、疲憊した不調和な生活を送つておるのを目撃しました。中にも、結婚問題、兩性問題は殊に屢々父からの重々しい非難攻撃の目標とせられました。

私は父が此事に就て話すのを聞いて是等の問題は人類の行爲の極く重く重くしい難澁な部分をなすものであるといふことを知りました。そして私は幼い無邪氣な頭で、すべての生物の中で人類のみがひとり斯く性を分たれてゐて、兎角その行歩を難くさせられてゐるといふことを深く悲しみました。

私は自分の智と情とを満足させる爲めに、如何しても此の難問を會得する必要があると切に感じました。而かもその方法としては何等の發見する所もありませんでした。その頃の年輩や感化閱歴

で如何してこの難問が解けるものですか。

けれども私の長兄が（他の兄弟と同じ様に家を離れてゐました）歸着して一寸の間逗留したことがありました。或日私が榛樹の花の紫色の花莖を見て悦んで居りました時に、長兄は私に植物にも同じ兩性の分れがあるといふことを知らせてくれたのであります。私はやつと氣を休めました。

私はそれまで私を苦しめてゐたものは、すべての自然界を統一するところの制度であつて、この制度には諸多の馱せる美しき花も忍従しつゝあるのであるといふことを認知しました。

それから後は人間と自然、人の生命と自然の生命とは私の心の内に緊密に結び付けられました。而して私は榛樹の花を私のために自然の神殿を開いてくれたる天使の様に思ひます。

私は今や求めてゐたものを得ました。教會に自然の殿堂が加はり、敬虔な基督教的生活に自然の生活が加はり、人間生活の激し易い葛藤に植物の生

活の靜平な平和が加はりました。それから後といふものは私は丁度生の迷宮を通して私を導いてくれるアリアドネの導線を持つてゐた様な者です。

十、人生と自然

三十年に餘る自然との親近な交誼は（尤もこれには屢々間斷があり、時には長い間中絶してゐたこともありすが）私に植物殊に樹木は人生の鏡、否寧ろ其の最上の靈的關係に於て人生の象徴であるといふことを教へてくれました。而して私は私達が智慧の木、善惡の木のことを聖書の中で讀む時人の靈から溢れ出づるいとも博大にして深刻なる豫感の一つが、私達の前にあるといふことを思ひます。

自然の全體は私達に善を惡から區別するやうに教へて居ります。結晶體や岩石の世界でさへ——植木や花の世界のやうに鮮明に靜平に明瞭に表示的にではありませぬけれども。

榛樹の花が私にアリアドネの導線を與へたこと

はもう申しました。

かくて多くの事柄が漸次明瞭に分るやうになつて來ました。例へば天國に在す私達の最初の父母の若き生涯や行動なども分つて來まして、多くの事柄もこれに結び付けて考へられました。

十一、三つの影響の第一

私が十才になるまで私の内の生活に影響を及ぼしてゐた三つの事柄があります。それを私は私的の生活的敘述を再び始める前に茲に記してみたいと思ひます。

當時の人々の愚劣、迷信、無智はそれまで彼等が行つて來た通りにこの世界は間もなく終つて了ふものであるといふ臆斷を敢てして居ました。併しながら私の心は依然としていとも靜平に保たれました。何故ならば私は適確に決定的に次の様に自分で論究して居りましたから——人類はこの世に満足してゐられない程の完全な域に達するまでは、現世から絶滅することもなければ現世そのも

のが滅落することもない。地球即ち狹義に於ける自然は人間が精髓に達する完き洞察力を得るまでは、尙のこと絶滅する憂ひはない。

この意見は私の生きてゐる間種々形を變へては戻つて來るのであります。而して平和、剛毅、忍耐、勇氣に對するこの意見の影響に私は非常に負ふ所が多いのであります。

十一、三つの影響の第二

この時代の終り頃の前にお話した事のある一番年上の兄（註曰、其の名をクリストフ、フレーベルといふ。エナ大學に遊べり）は大學に在つて神學を研究して居りました。

哲學的の批評は當時基督教會の教義をさへ解釋しやうと掛つて來たのであります。それ故に屢々父子で其の所説を異にするといふ様な事は大して驚くべきことではありませんでした。

私は或日父と此の最年長の兄とが宗教及び教會の事に就て激しい論争をしたのを覚えて居ります

父は激して兄の論點の承認を極端に拒みました。

兄は柔らかな性質でしたが、興奮して眞赤になりました。而して兄も亦自分で眞理と認めたものを如何しても棄てることは出来ませんでした。私は他の多くの場合と同じく、この時も不注意な傍聴者として其の場に居合せました。而して今日尙父子が面と面とを衝き合せて意見を上下してゐる有様を眼に浮べることが出來ます。

私はこの論議の題目の幾分かを略ぼ理解し得た様に思ひました。私は兄の説に與すべきである様に感じました。けれども同時に父の意見にも相互理解の可能性を誘導すべき何物か含まれてゐる様に見えました。

私は臆氣ながら、諸有幻影わづらひには人々をして死力を盡くしてしつかり固着させる所の現實の半面のあることを疾くに感じて居りました。この確信は私が成長するに連れて漸次強くなつて參りました而して何時でも二人の人が眞理のために論争して

ゐるのを聞いた時には、私は眞理は大抵兩方の側から學ばれるものであるといふことを悟りました。それ故に私は決して片方かたかたに與することを好みませんでした。これは私に取つては幸福な事でありました。

十三、三つの影響の第三

それから三つ私の品性の色彩を形成るに際立つた影響をなした所の少年時代の他の經驗は以下に記す所のものであります。

我が國教の信奉者に向つてある要求が屢々繰返されてなされました。即ちキリストの勤行を始めるとか、各人の生活の上にキリストを表示するとか、エスに従ふとかいふ様なことであります。

そして、是等の教誡は他人の教父として、將た又身親ら基敎的生活を送る生活者としての私の父の熱心から、數限りもなく屢々私にも齎されました。

私は此の要求を大切のことだとは思ひました。

併し私はそれが随分六かしいことでまた私には不可能のこの様に思はれました。

私が茲に認知した様に思ふ所の生得の矛盾は私を大なる鬱憂に投げ入れました。併しながら私は遂に人間の性質は若し適當な方法を取りさへするならば其の精純に於てエスの生涯を生活し、又その生活を世界に表示することを不可能としないものであるといふ祝福すべき確信に到達しました。

屢々私の心に起つて來ては今でも私を少年時代の場景や境遇の中に連れ戻つてくれる所のこの思想は多分この時代の最後の精神上の感化でありましたらう。そこでこの時代の心的開展の敘述はこの邊で歇めるのが適當であります。この思想は後に至つて私の全生涯の頼みとするものとなりました。

十四、家庭内の不快

私のお話した私の子供らしい内的生活から類推

して私の外的生活までも幸福で平和なものであつたと思はれるかも知れませんが、けれども斯る臆斷は正しくはないのであります。

全體常に最も難澁にして最も劃然たる矛盾を表し且つこれを抱合させるのが私の運命であつたかの様に思はれます。

私の外的生活は私の内的生活とは實際非常な相違を示して居りました。私は母なくして成人ひととなりました。私の體育は怠られて居りました。而してその結果私は幾多の悪い習癖を得ました。私は常に何事をかなしつゝある事を好みました。けれども不器用な私は材料や時間や場所の選擇を誤つた爲めに屢々兩親の嚴しい不興を蒙りました。私は感じ易い性質でありましたから、これを兩親よりも鋭く永久的に感じました。多くの場合實質よりも外形で叱られるのであると感じた時殊ととに爾そでありました。而して私は内心に於て何は兎もあれ實質に於て私の行爲はすつかり間違つてはゐな

いが而かも尙幾分非難に値する所があるやうだといふ觀察をして居りました。私に言はせますと、私の行ひの動機と推定せられた動機は事實に於て私を働かせてはゐなかつたのであります。見損はれて居るといふ自覺が、私を前に信せられてゐた所のもの、即ち眞個ほんごとに仕様のない横着な子として了ひました。罰せられるのを恐れて私は些ちつとも害の無い行動をさへ隠し立てました。而して私が尋問された時には私は虚偽の答をいたしました。

約言すれば私は悪者として決められて了つたのです。而して私に對する非難の當否を調査する暇のない父は、是等の事實を單に告げられた通りに記憶して居りました。私の疎略にされた幼時は他の嘲笑を呼びました。繼母と遊んで居る時などにも、何でも遣り損ひになつたことは繼母に言はせると皆常に私がその原因でありました。

兩親の心が漸次私から離れて行くに従つて私の方でも私の生活は漸次兩親から掛け離れて行きま

した。而して私は私の心的傾向が充分健全でなかつたならば、両親よりも尙もつと私を害をこなうたかも知れない人々の群れに向つて放擲せられました。私はこの不幸な状態から逃れたいと願ひました。而して私は兄達が家から離れてゐるのを運の好いことであると思ひました。

丁度この悼ましい時に當つて私の最長兄が歸省いたしました、長兄は私には救ひの天使の様に思はれました。何故ならば長兄は缺點多き私から比較的優良な性質を認めて虐待さるゝ私を保護してくれたからであります。長兄は少しの間逗留して又行つて了りました。けれども私は其時以來私の靈は内心の深みに於て兄の靈に結び付けられてゐるのを感じました。而して長兄の死後長兄に對する私のこの愛は實際私の生涯の全程と化つて行きました。

恵みは遂に私の上に齎あづからされました。而してその恵みといふのは私の熱望してゐた所の父の家を

去るといふことでありました。若しこの時父の家を去らなかつたならば私の外的生活と内蔵生活との間に横はる著しき矛盾は只管私を囚へやうとして始めた悪い心の傾向に當然進展して行つたに違ひありません。

今までの生活とは全然異つた新生活が私の前に開けました。私は此の時十歳九ヶ月でありました。

十五、叔父の家へ

私の母方の叔父が此の年に私の家を訪ねました。叔父は柔らかな情愛の深い人でありました。叔父が私の家へ來たことは私に最も快い印象を與へました。

この叔父は世馴れた人でしたから私を圍繞してゐる好ましくない感化に氣が附いたのでせう。叔父が歸つてから間もなく叔父は書面を以つて父に私を完く自分の手に任して貰ひたいと願ひました。父は早速同意いたしました。而して一七九二

年の終頃に私は叔父の許に行きました。

叔父は早くから妻と子を亡くして了ひました、

而して只養母ばかりが叔父と一緒に家に住つて居りました。父の家では嚴酷が極端に勢力を擅にし此所ではそれと反對に溫和と親切が時めいて居りました。父の家には私は不信用と争つて居りましたが叔父の家では私は信用されました。父の家では私は抑制の下に居りましたが、叔父の家

では私は自由を得ました。これまでは私は私と同輩位の子供達と一緒にゐたことは滅多にありませんでしたけれども、叔父の家へ來てからは四十人の學校友達を得ました。といふのは私は町の學校の上級に入學したからであります。

小さなスタッドイルムの町は廣い谷の様な所の清澄な小川の土手の上にあります。

叔父の家には附屬の庭園がありまして、私は自由によこの庭園へ行くことが出來ました。又私は時間通りにキチント歸宅するといふ嚴格な規則を守

りさへするならば、近所を自由に歩き廻ることも許されて居りました。

叔父の家に於て私は新らしい牛のエネルギーを息をも吐かずに吸ひ込みました。何故ならば以前は家に在つて屋外へ一步も踏み出すことを許されてゐなかつたのですが、今ではあらゆる場所が私の遊び場所となつたのであります。

私は靈の自由と身體の力とを得ました。

十六、楽しい生活

私達を教へてゐた僧侶は決して私達の遊戲に干渉しませんでした。私達は或る定つた遊び場で何時も大層面白く元氣よく遊びました。

私達が遊んでゐる時に體力殊に敏捷といふ點に於て同年輩の他の子供に及ばないために屢々侮慢を受けるのが私に取つては非常に恥しくありました。而して私のすべての氣力も敢爲も私の友達を持つてゐた強壯な動きなき力と目的に對する確固たる自由とを得ることは出來ませんでした。

幸福なる人々よ、彼等は彼等の若々しい少年の力を不斷の演習の中に成人ひととなつて來たのであります。

學友が彼等の遊戯に私を到頭仲間入りさせてくれる様になつた時、私は自身を非常に好運であると感じました。

けれども練習により意志の不斷の努力により生の自然の進路により私が完成した所の體力に關する事はすべて友達の緊制されない若々しい力に較べると生理的に劣つてゐるといふことを常に私は自ら感じました。

以前の教育に依つて私が失つて來たものゝことは暫時置いて、私の新しい生活は外部的の制限によつて剛健になり自由になりました。而して私は機會を善用したものであると人々が申します。

世界は私の掴み放策に私の前に開けました。それは實際以前の生活が束縛され拘束されてゐたと同じ程度に於て私の現在の生活が自由であり無干

渉であつたためでありませう。

それは兎も角私の少年期の友達は今時の數個の出來事を私に思ひ起させます。その出來事は私の善い心を我儘な不羈の域にまで誘つたことを思ひます。勿論私の品行は同年輩の私の友達から較べると遙かに靜肅ではありましたがれども。

これまで黙つて行つて來た自然との交誼は今では以前よりも自由になり旺んになつて來ました。而して同時に叔父の家には平和と靜謐な默想とが充ちて居りましたので私が成長するに従ひ私の性格の其方面を發達させることも亦出來ました。斯くて總ての方面に於て私の生活は圓滑に平衡して行きました。

十七、有益なりし宗教科

等しく教育の中心たりし二つの場所に於て私は非常に氣安く感じて居りました。うっかりしてゐるよりも尙氣安く常々思つて居りました——それは教會と學校とであります。學校では私は殊に宗

教教育の時間を好みました。

叔父の説教は叔父の人柄及び生活に丁度ふさはしいものでありました、叔父の説教は穩健で心よく愛寵的親切に充ち満ちて居りました。私は叔父の説教をよく理解することが出来ました、而して月曜日に學校で繰返す時に私はその説教の大部分を話すことが出来ました。けれども私達の學校の先生の宗教教育は最もよく私の要求に應じました自分で種々解釋した事柄は先生によつてもつと明瞭にされ又先生によつて確證を得ました。

後年私が大人になつて叔父にこの先生の教授の卓れてゐたことに就て話しますと、叔父も先生の教授は全く大層善かつたが、話された相手に取つては餘り哲學的で深奥すぎたと言ひました。而して叔父は尙言葉を續けて、「お前は既にお前の阿父さんから非常に善い教育を受けてゐたからお前には丁度よかつたかも知れないと言ひました。

それはさうとして置いて、この教授は私を鼓舞し元氣附け暖めました。——加之、殊にそれがエ

スの生涯、事業、人格に觸れた時は、それは私の身内に燃えて私の心は遂に完く熔かされました。

この時に私は涙に咽び、而してエスと同じ様な生活を未來に於て送りたいといふ願望が判然として來て、私の靈をすつかり充たして了ふのでありました。

其當時起つた所の私の若々しい精神の亢奮の話を今になつて聞く時、私はこの事が淺學な觀察者をして宗教の訓誡や教示は私の心の上をカスリ過ぎたゞけでその痕を留めなかつたといふ誤つた考を懷かせたに過ひないと思はない譯には行きません。而して斯る觀察者が如何して私の内的生活の眞態を判斷することが出来ませう。

十八、他の學科

スタッドイルムの學校で最もよく教へられた課目は讀み方、書き方、算術及び宗教でありました、羅旬語は甚だ拙く教へられました、そして一層拙く學ばれました。

此校でも他の同程度の學校と同じく教授法は第

一義の説明を全然缺いて居りました。斯る教授法では學ぶ者に裨益する所が無いと知つたので私は羅句語の爲めに時間を費すことをしませんでした。

算術は私の最も好きな學科でありました。而して私は又この學科の個人教授を受けて居りましたので、私の進歩は非常に急速でありました。そして先生の學識は却々侮るべからざるものでありましたが、理論及び演算に於て二つながら私は先生と同じになつて了ひました。けれども二十三才の時始めてイエルドンへ行つて學生に提出された問題を解くことが出来なかつた時は私は甚麼に驚いたでありませう。それが私をしてベスタロッターの教授法に心酔せしめ、而して彼の組織によつて再び算術を習ひ返さうと私に決心させた經驗の一つであります。併し後には算術以外種々に就いて學ぶ所が多かつたのであります。

地文學に於ては覺える事柄を鸚鵡のやうに幾度も繰返しました。幾度も口でいひましたが何も知りませんでした。何故ならば私達は地圖の上の彩

られた小さな點や線を正しく名指すことは出来ましたけれども、この學科の授業は私達の實生活に何等の關係もありませんでした。又それは私達のために何等の實在をも持つて居りませんでした。

私はこの學科も亦個人教授を受けて居りました。私の先生は私と共にもつと研究したいと望みましたが、先生は私を英國へ連れて行きました。私はこの國と私が住つてゐた所及び國との間に何等の關係をも見出すことが出来ませんでした。それ故にこの學科にも亦私は極く尠^{すく}しか止まつて居りませんでした。

獨逸語の實際的敎示に關しては何も話されませんでした。けれども私達は手紙の書き方と綴り字に於て敎示を受けました。私は綴り字の授業が何の學科と關係してゐるか知りません、しかしそれは何の學科にも關係してゐないと思ひます。それは空中に彷徨して居りました。

私はその他に尙唱歌とピアノを習ひましたが成功しませんでした。私は後章に至つてこれを記しますから今はこれだけに止めて置きます。

フレーベル會規則 (抄)

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保

育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ齎出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノ

ハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

- 一、總會、毎年十月之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育參考品
- 幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス
- 一、常會、毎年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演

説、談話、協議、實驗等ヲナス

尙毎年四月廿一日特ニフレーベル紀念ノ爲メ會ヲ開ク

一、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組

織ス

但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス

一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

本會々長

中川謙二郎

本會幹事

(イロハ順)

井村 くに 池田 トヨ 芳賀 晴

坂内 ミツ 和田 實
 武井 綱枝 岡部 ヤす
 安井 哲 福田 ふく
 雨森 鉶 坂井 ふで
 和 田 くら
 倉 橋 惣三
 小 向 きみ

本會評議員 (イロハ順)

乙竹 岩造氏 吉田 熊次氏
 野口 幽香氏 横山 榮次氏
 下田 次郎氏 日田 權一氏
 田中 ふさ氏
 藤井 利の馨氏

本會客員 (イロハ順)

伊澤 脩二氏 巖谷 季雄氏
 波多野貞之助氏 細川 潤次郎氏
 戸野 周次郎氏 大瀬 甚太郎氏
 尾田 信忠氏 大久保 介壽氏
 唐澤 光徳氏 谷 本 富氏
 棚橋 源太郎氏 多田 房之輔氏
 中島 力造氏 中村 五六氏
 野上 俊夫氏 黒田 定治氏
 松本 亦太郎氏 松本 孝次郎氏
 富士川 游氏 小西 信八氏
 雀部 顯宜氏 櫻井 光華氏
 篠田 利英氏 東 基 吉氏
 尺 秀三郎氏 菅原 教造氏
 岩 谷 英太郎氏
 本間 長藏氏
 奥 好 義氏
 嘉納 治五郎氏
 高島 平三郎氏
 田中 敬一氏
 野尻 精一氏
 久留島 武彦氏
 馬上 孝太郎氏
 淺 岡 一氏
 三島 通良氏
 瀬川 昌耆氏

幼 稚 園 用 品

家 庭 用 玩 具

東 京 九 段

フ レ ー ベ ル 館

新築後工場も整頓致し店も精々片々付き申候間益々
 業務に奮勵仕り物品を精選し格價を最も低廉に
 需に應じ可申候に倍舊の御愛顧を願上候

日 本 玩 具 研 究 會

會 員 募 集

會費は一ヶ月五拾錢にて研究した面白い御爲めになるよい玩具が毎月得られます(申込次第規則書送る)

本 會 評 議 員

- | | | |
|--------|--------|-------|
| 巖谷 小波 | 甲賀 藤子 | 吉田 熊次 |
| 多田房之助 | 野口 ゆか | 倉橋 惣三 |
| 黒田 定治 | 久留島 武彦 | 山脇 春樹 |
| 町田 則文 | 小西 信八 | 三土 忠造 |
| 三輪田 元道 | 莊司市太郎 | 森村 開作 |

本 會 幹 事

- | | | |
|-------|--------|-------|
| 稻垣 知剛 | 和 田 實 | 河野 清丸 |
| 高市 次郎 | 曾根松太郎 | 武藤 忠義 |
| 野村 忠寛 | 松 田 茂 | 藤 五代策 |
| 岸邊 福雄 | 御園生金太郎 | |

申込所 東京九段 日本玩具研究會

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回五日發行)
 婦人と子ども 第十四卷第二號 大正三年二月五日發行